

月例研究会（2016年4月16日）

環境アーカイブズ所蔵資料の整理と活用

清水 善仁

2009年8月、法政大学サステイナビリティ研究教育機構のなかに「環境アーカイブズ・プロジェクト」が発足した。同機構の閉鎖により、環境アーカイブズは2013年4月から大原社会問題研究所に移管されたが、発足から7年、一貫して資料の収集・整理・公開を進め、研究者による利用はもとより、見学者の増加や様々な媒体に取り上げられる等、少しずつではあるが社会的な認知度が高まってきている。

そもそも、「環境」という広い対象あるいは概念に特化したアーカイブズ組織というのはこれまで類例がなく、その意味では環境分野におけるアーカイブズの「フロントランナー」としての役割もあるのではないかと考えている。では、その役割をどのように果たすべきか——その一つに研究活動がある。資料の特性やそれに応じた整理・公開の方法について、あるいは大学における教育・研究活動への関与の在り方について等、論じるべきテーマは少なくない。そこで、今回の月例研究会では、こうした環境アーカイブズをめぐる諸問題について考察を深めることを目的に、環境アーカイブズでリサーチ・アシスタント（RA）の経験を有する2名の方に報告をお願いした。以下、研究会の概要をまとめたものである。

西田善行「環境・原発問題をめぐる映像資料整理の意義と課題——環境アーカイブズの視聴覚資料から」は、環境アーカイブズでの映像資料の整理の経験をふまえて、映像資料のアーカ

イブ化をめぐる意義と課題について考察したものである。映像資料の多様性や市民運動における映像資料の意味について述べた上で、映像資料の整理におけるいくつかの課題を指摘する。すなわち、目録整理の在り方、他機関等との目録情報の共有化、著作権、保存環境やデジタル化等である。

質疑では、資料論的な観点から、映像資料の持つ独自性や映像資料と音声資料の違い等についての指摘があったほか、社会運動研究をはじめとする社会科学の研究素材としての映像資料の可能性、様々な分野における映像資料の活用の問題、タイトルの「環境・原発問題」と映像資料との関係性等について質問がなされた。

野口由里子「環境アーカイブズにおけるミニコミ資料利用の展開と可能性」は、環境アーカイブズで所蔵しているミニコミ資料群（東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料）の整理を通して考察したものである。まず「ミニコミ」の定義や基準について紹介がなされた後、環境アーカイブズにおける同資料群の整理の実際や、整理を通してみられた資料の特徴等が述べられ、最後にミニコミ利用の展開と可能性として、市民運動研究や自治体史編纂への活用等の点が示された。

質疑では、まず「ミニコミ」の定義や解釈について議論が集中し、先行研究における定義の妥当性や現在の「ミニコミ」の拡がりへの注意喚起がなされ、再定義も含めた検討の必要性が指摘された。そのほか、「ミニコミ」の読者（受容者）層への視点や、環境アーカイブズ所蔵資料に限定せず、「ミニコミ」を資料論として一般化できないか等、多岐にわたる質問がなされた。

なお、これらの報告は、本誌694号（2016年8月号）の特集として、他の論考とともに掲載される予定である。

（しみず・よしひと 法政大学大原社会問題研究所准教授）